



# 死ぬまで9歳

11月7日

Sudden Fiction Project

高階 經啓  
hirotakashina

## 11月7日のおはなし「死ぬまで9歳」

何年も経って、もう笑い話にできるようになって、それでもあなたはその飾り棚には手をつけなかった。そこにはあまりにも濃厚に、彼の気配が、記憶が、それこそ息づかいさえもがそのままに保存されているように思われたからだ。大事に取っておこうとしたのかって？ それは違う。とあなたは思う。うっかりそれに触れてしまうと、嵐に吹きさらわれ、洪水に押し流され、いま立っている足場を失ってしまう。だから手をつけなかったのだ。

女友だちが集まって、いままでに付き合った男たちの話を冗談めかしてしゃべるとき、もちろん彼の話はとびっきりのネタだった。だってロックンローラーよ？ フツーなわけ、ないじゃん。あれってロックンローラーだから、メンツもあってフツーじゃないコトしているのか、フツーにできないからロックンローラーになったのかどっちなんだろうね？

そう。まさしく彼はネタの宝庫だった。出会ったときからそうだった。あれは確かこの部屋よ。そう、わたしは取材で彼の話を聞きに来ていたの。結構いい話を聞かせてもらえてね、おかげでその記事でわたしの評価もあがった、記念すべき仕事。伝説的なカップルの秘話を聞かせてもらったの。そう、もちろん彼と、あの有名な彼女との思い出。しみじみしちゃってね、思ったよ。かなわないな、そんな恋には。それが彼、いい話をした次の瞬間にはわたしを口説き始めてさ。

何それ、うそでしょ、まさかそれで受けたんじゃないでしょうね、という声を受け流し、あなたの視線はその飾り棚をさまよう。ジーンズのポケットにくしゃくしゃに丸めて突っ込んだ汗くさい札束をその棚に置く彼。何に使うのか本人もよくわかっていない鍵がじゃらじゃらとたくさんついた鍵束を無造作に飾り棚に放りあげる彼。昔ほどうまくなくなったと文句を言いながら12年ものオールドターキーをついで飲み干した彼。

屋上から飛び降りた話はしたっけ？ えー、何それ？ ドラッグをやっていたわけでもなく、酔っぱらっていたわけでもなく、夏の真っ昼間、屋上から街路を見下ろしていて、ここから落下するときに景色はどんな風に見えるのだろうと、それが知りたくてたまらなくなり5階から飛び降りたのだ。たまたま幌付きのトラックが走ってきてうけとめてくれたからよかったようなものの、さもなければ間違いなく自殺とみなされているところだ。それが72歳の老人のすること？ えー？ そのとき72歳だったの？

そんな年齢になって、どんな風に愛し合ったのか、話題はそこに集中する。大丈夫、ご心配なく。とあなたは言う。ちょっと独特な方法だったけど、わたしたちはたっぷり、うん、できたから。でもそうね。75歳ごろからごほごほごほごほ止まらなくなって中断することが多くなったわね。それ以上もう何も聞き出せないさそうだとわかり、やがて友達は帰っていく、それぞれの家庭へ。ロックンローラーとは縁のない世界へ。人気のなくなった居間のソファに身体を投げ出し、飾り棚を見ながらあなたは考える。今日なら大丈夫かも知れない

裸足でカーペットを踏みしめ、飾り棚の前に立つ。手を伸ばし棚板に触れる。こんなにそばに寄ったのは何年ぶりだろう。ほこりも積もってしまって、棚板は彼よりも年を取っているみたいに見える。知恵の輪。本物かどうかわからない銃弾。ぼろぼろのトランプ。ああ、やっぱりまだきついな。消しゴム。消しゴム？ なんだってそんなものを居間の飾り棚に置くんだろう。お気に入りのサングラスが3つ。どこかの子どもから巻き上げたポケモンの指人形。まるで小学生の部屋みたい。そう。あの人はいつまでたっても小学生みたいだった。

それからその錠剤を見つける。彼の命を絶った錠剤を。こんなところにまだあったなんて。あなたは愕然とする。一瞬手に取るが恐ろしさのあまり取り落とし、もう触ることができない。彼を奪った錠剤。どうして自分で命を絶つようなことをしたのか、あなたにはわからなかった。およそそういうことをする人ではなかったからだ。震えた手が当たったのか、ポケモンの指人形が落ちて転がる。

あなたはしゃがみ、柔らかい材質でできたその人形を手取る。間の抜けた顔をしたキャラクターが大きく口を開けて笑っていて、どこことなく彼の馬鹿笑いを思わせる。しゃがれた声で、ごほごほ咳き込みながら胸のあたりをバシバシ叩いて、彼はよく笑った。ああハニー、笑わせるんじゃない。笑い過ぎと咳のし過ぎで死んじゃう。ばか。死んじゃったじゃない、本当に。その時指人形がしゃべる。

「咳を止めたかっただけだ、ハニー。もっと愛し合えるようにな」あなたは思い出す。彼がそれを、あの薬を咳止めと呼んでいたことを。「咳も止まったが、その他の何もかも止まっちゃった」

あなたは口元を手で押さえる。たぶんそうだったんだろう、その通りだったんだろう。あなたは意味もなくあたりを見回し——まるで誰かを探しているように——それから大きくひとつ息をして、自分は笑い出そうとしているのだろうか、泣き出そうとしているのだろうかと考える。

(「咳止め」 ordered by sachiko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

## 感謝の言葉と、お願い&お誘い

---

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただくと大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできますようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

## 死ぬまで9歳

<http://p.booklog.jp/book/37968>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37968>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37968>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.